



ふゆのりや つちのりや 浮萍 一道 開く

● NPO法人ホップ
障害者地域生活支援センター

代表理事 竹田 保

いつもより雪の多い年だと思っていたが、3月下旬からの陽気で一気に雪解けが加速した。道路脇の雪山も消え、最近まで5メートルを超えていた事務所駐車場の雪山もすっかり消えてしまった。ようやく雪を気にすることもなく、天気の良い日は、車いすで出かけていけるようになってきた。

今年の年始に知人から届いたプレゼントの啓翁桜を事務所入り口に花瓶で活けていたが、つい最近まで綺麗に咲いていた。1月から3月の冷氣の中にもかかわらず咲いていた桜の花も、陽気とともに舞い散り、葉桜となってきた。数ヶ月も花が咲き、葉桜の新緑となり楽しませてくれる。あらためて桜の生き抜く力を感じさせられた。

ここ数年、コロナ、コロナで明け暮れる日々が続き、正直言って辟易としている。そんな中、ロシアによるウクライナ侵攻が始まった。連日、コロナ、ウクライナ侵攻が報道され、より一層、憂鬱な思いにさせられる。

障がい者福祉に関わり始めたばかりの頃に、立命館大教授の長瀬修さんを招いた研修会に参加したことがある。当時は元国連職員という肩書きだったと思うが、世界の障がい者福祉について、知識を拡げる貴重な機会になると思い参加させていただいたが、当時の自分にはショッキングな内容で、研修終了後に時間をいただいたことがある。

長瀬修さんが研修で触れていた、『ナチスドイツと障害者「安楽死」計画』現代書館、ヒュー・グレゴリー・ギャラファー（長瀬修訳）は、今でも自宅に大切な、自分にとって仕事を進める際の知識の源となっている。

長瀬さんから話を聞いてから数年後にドイツフランクフルト郊外のハダマーの精神病院を訪れたことがある。戦争と障がい者、差別が排除

へと変わる様などが記録されていた。働くことの価値とは、生きることの価値とは、社会のなかでの価値とは、自分自身の価値とは、深く考えさせられた。

ロシアとウクライナの戦争では、ジェノサイド、ネオナチといったことが正当化として言われている。ハダマーでは『生きていないことに値しない価値』、『労働ができない社会に貢献できないもの』、これらは後に、ユダヤ人虐殺で知られるアウシュビッツ強制収容所（第一収容所）へと繋がったと言われている。

アウシュビッツの入口のゲートには、「ARBEIT MACHT FREI（働けば自由になる）」の文字が書かれてあるが、実際には、いくら働いたところでほとんどの被収容者は自由どころか生き延びることすらできなかったと聞いた。アウシュビッツを訪問時に案内していただいた日本人ガイドの中谷さんから前館長が言われていた『ただ、泣くのではなく、寄り添い、考えて欲しい』との言葉が今も響く。

病気療養のため、幼少期の大半を病院で過ごしていた。病院では季節の変化を実感することも少なく、冬の間は風邪症状などの体調不良予防から外出も制限され、雪どけを心待ちにしていた。

病室の窓からは春になると、桜の樹がみえ、桜の花が咲くのを楽しみにしていた。北海道の桜は5月のゴールデンウィークと重なり、二重に楽しみにしていたのかもしれない。桜の美しさと儚さに日本人は共感を得ていると聞いたことがあるが、自分の場合は、長い閉塞感からの開放へのわくわくする気持ちと生き抜いて行く気概を桜から感じる。

用務で東京に出かける機会があり、日比谷公園の脇を電動車いすで通った際に、桜が満開に咲いていた。寄り道をして、公園内の桜を観ながら移動したが、札幌ももう少しで桜が咲き始めるのではないかとわくわくした。

日本にもウクライナからの避難された方が来ているようだが、桜をみて欲しいと思う。戦禍にいる障がい者にもいつかみて欲しい。戦争は悲劇、恐怖苦しみ、絶望と新たな障がい者を生む。生き抜くことを願い、寄り添いたいと思う。